



自我の強さの二つの測度の関係についての検討： バロンのEs尺度とクロツパーのRPRS

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 正義 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00001507

自我の強さの二つの測度の関係についての検討

— バロンの Es 尺度とクロツパーの RPRS —

鈴木 正義

北海道教育大学函館分校教育心理学研究室

Masayoshi SUZUKI

An Investigation of the Relations between Two
Measures of Ego Strength

— Barron's Es Scale and Klopfer's RPRS —

1. 問 題

Barron (1953a, b) によって構成された Es 尺度 (ego strength scale) は, MMPI から抽出された項目から成る尺度の一つである。彼の本来の目的は, 神経症患者に対する心理療法の効果を予測すること, すなわち, 心理療法によって改善される患者と, 余り改善されない患者とを, 治療開始前に分類できる尺度を構成することであった。彼は33人の患者に6カ月間心理療法を実施した後, 2人の熟練した判定者によって, 改善された患者17人と改善されなかった患者16人とに分け, これら2群間に弁別力のあった MMPI の68項目を選んだ。これらの項目に関して, 改善群が治療前に示した特徴は, 非改善群と比較するとき, a. 良好な身体機能状態, b. 自発性, 情緒的経験を共有する能力, c. 慣習的な信者であるが, 聖書の創造説を信じて進化論を排する原教旨主義者ではないし, 宗教的教条主義者でもない, d. 許容的道德観, e. 現実との良好な接触, f. 人格的適当感と活発性, g. 勇断実行力と恐怖心の欠如などに要的されるものであった。また, 非改善群は, a. 多くの慢性的身体上の疾患, b. ふさぎ込み, 抑制, 情緒的隔離への強い要求, 心配性, c. 激しい宗教的経験, 祈禱・奇跡・聖書に対する信仰, d. 抑圧的・処罰的道德観, e. 分裂と自我疎外, f. 混乱, 慢性的疲労, g. 恐怖症および小児的不安などの特徴を示した。もちろん, これは群間比較の結果であって, 改善を示した神経症患者が, 上述の言葉通りの強い精神的健康を有していることを意味するものではなく, 改善群と非改善群とが, 異なるパーソナリティ次元にあることを意味するものに過ぎない。

その後, Barron (1953b) は, Es 尺度に関する正常者と神経症患者との比較研究, 空軍士官と大学院学生に実施した Es 尺度と多種のパーソナリティ・テストおよび知能テストとの関係に関する研究の結果, 神経症患者に対する心理療法の効果の予測を本来の目的としたこの尺度が, 「自我の強さ (ego strength) の名のもとに通常包含されている有効な人格機能の種々の側面を測定する」尺度として解釈されたとした。彼によれば, 心理治療過程において, 患者は自分の内部に在るある心理的潜在力を利用して回復してゆくものとされるが, 「この予測尺度の項目内容が示しているものは, この潜在力が, 一般に十分に機能している自我と呼ばれる種類の力であり, 短期心理療法の効果の最も重要な患者内部の決定因子は, この潜在的自我の強さ (latent ego strength) である」

と述べている。

同じ頃、Klopfer (1951, 1954) は、ロールシャッハ・テストを用いて、患者が心理治療過程においてどれ程利用できる自我の強さを有しているかを、知ることによって、その患者の治癒可能性を予測しようと企てた。彼は、精神分析的自我心理学に拠る他の研究者と同様に、自我を多数の仮説的機能に対して与えられた集合名詞と考え、自我という概念は、相互に関連をもっている多数の構成概念を包括しているとする、この構成概念の主なものとして、現実検証 (reality testing)、情緒的統合 (emotional integration)、自己実現 (self-realization)、現実事態の統御 (mastery of reality situations) をとりあげ、この自我を組成する諸機能を最も効果的にロールシャッハ反応から把握しようとした。このようにして、彼は、自我機能を表わすと推定されるロールシャッハ指標を集め、予後評定を目的として、RPRS (Rorschach Prognostic Rating Scale) を作成した。彼によれば、RPRS が測定する対象は、(1)現在の適応水準、すなわち、患者が現在利用している自我の強さと、(2)適応潜在力、すなわち、患者が未だ利用していない潜在的自我の強さ (unused ego strength) の両方である。

上述のように、質問紙法による Es 尺度と投影法による RPRS は、ともに、自我機能の健全度を測定し、かつ、心理療法による効果を予測しようとしている。これらの作成者が述べているように、両尺度は、ともに、自我の強さの測定を意図しているが、もし、同一のパーソナリティ属性を測定しているとするならば、両尺度は高い正の相関を示すことが期待される。本研究は、従来に関連ある諸研究と比較しながら、Es 尺度と RPRS との関係を検討しようとするものである。

2. 方 法

(1) 被 験 者

本研究に参加した被験者は、本研究者の講義を受講している北海道教育大学函館分校の学生 105 人 (男子 54 人、女子 51 人) である。被験者の年齢は、男子において、範囲が 18 歳 7 カ月～24 歳 7 カ月で、平均が 20 歳 4 カ月であり、女子においては、範囲が 18 歳 7 カ月～21 歳 10 カ月で、平均は 20 歳 2 カ月である。全体としては、範囲が 18 歳 7 カ月から 24 歳 7 カ月にわたり、平均は 20 歳 3 カ月である。

(2) 手 続

i) 被験者全員に Barron の Es 尺度 68 項目を課し、回答を求めた。Silverman (1963) は、慢性分裂病者 32 人と正常者 36 人 (心理的に健康と診断された肺結核入院患者) を被験者として、Es 尺度 68 項目が単独形式で用いられた場合、MMPI 項目の文脈において実施されたときと同じ程度の信頼性と妥当性を示し得るかどうかを検討している。その結果、彼は両者の間に非常に高い相関があること (慢性分裂病群においては $r=0.85$ 、正常群においては $r=0.91$) を見出し、Es 尺度が MMPI の文脈から離されて単独形式で実施されても、その信頼性と妥当性において有意な変化を生じさせないと結論している。したがって、本研究では、Es 尺度を単独形式で実施した。但し、項目の順序は MMPI における順序にしたがっている。

ii) 全員に、ロールシャッハ・テストを標準ロールシャッハ図版 (東京ロールシャッハ研究会監修) を用いて、個別的に実施した。実施方法、分類体系、形態水準評価法は、Klopfer 法にしたがった。次に反応を RPRS の計算法によって採点し、加重得点を求めた。

iii) その後、Es 得点と RPRS 下位項目 [M], [FM], [m], [Sh.], [Col.], [F.L.] の各得点および合計得点 [Sum] について、従来の研究との比較、両尺度の得点間の関係を検討した。な

お、Es 尺度項目と RPRS の内容は、本稿の末尾に載せてある。

3. 結果と考察

第1表は、男子群、女子群および両群別に示した Es 得点と RPRS [Sum] の範囲と中央値である。第2表は、各群の Es 得点と RPRS [Sum] の平均と標準偏差、および、男子群と女子群との群間比較を示している。第3表は、本研究の結果と比較して意味があると思われる従来の研究によって報告された Es 得点と RPRS [Sum] の平均を示している。

第1表 各群の得点の範囲と中央値

テスト得点	群	範囲	中央値
MMPI Es 得点	男子群	24 ~ 54	40.5
	女子群	24 ~ 49	38.6
	両群	24 ~ 54	39.5
RPRS (Sum)	男子群	0.60~10.67	6.32
	女子群	0.67~12.66	6.70
	両群	0.60~12.66	6.55

第2表 各群の得点の平均と群間比較

テスト得点	男子群		女子群		p	両群	
	平均	SD	平均	SD		平均	SD
Es 得点	40.06	6.30	38.25	5.69	<0.2	39.18	6.07
RPRS(Sum)	6.35	2.49	6.65	2.56		6.49	2.54

第3表 他の研究における Es 得点と RPRS [Sum] の平均

被験者	人数	Es	RPRS	SD	研究者
大学院学生(男)	40	50.92	—	5.62	Barron (1953)
男子正常者	226	44.33	—	6.21	Hathaway & Briggs (1957)
女子正常者	315	40.21	—	6.36	Hathaway & Briggs (1957)
学生相談治癒者(男・女)	13	—	5.64	—	多田 (1960)
学生相談未治癒・中断者(男)	8	—	1.93	—	多田 (1960)
正常者(男・女)	20	47.85	—	—	小川 (1965)
大学生(男・女)	30	—	8.84	1.99	鈴木 (1965)

先ず Es 得点について、本研究の結果と従来の研究の結果を比較してみると、本研究の男子群、女子群および両群の Es 得点の平均は、Barron や Hathaway & Briggs の研究結果よりも低く、小川の研究結果よりも低い傾向がみられる。

Barron (1953), Taft (1957), Hathaway & Briggs (1957), Getter & Sundland (1962) の研究においては、男子群の Es 得点は、女子群のそれよりも、いずれも有意に高い結果が出されている。本研究においては、男子群は女子群よりも高い Es 得点を示しているが、その差は統計的に有意ではない ($t=1.5273$)。

Getteer & Sundland は、このような従来の男子群の高得点は、自我の強さそのものからだけでなく、男性のもつ文化的役割から説明され得るかもしれないと述べている。すなわち、この Es

自我の強さの二つの測度の関係についての検討

尺度の項目に対する反応は、反応者が種々の心理的、身体的弱さを容認するか否認するかという行動を示唆するものであり、男性は、その文化的役割上から、弱さを認めたくないのであり、その結果が高い得点となって表われてくるというのである。Gottesman (1959) は Es 尺度と MMPI の K 尺度によって測定された心理的防衛性との間に関係のあることを見出し、Es 得点は「パーソナリティについての社会的に望ましい諸特徴を識別する能力」を反映していると結論しているが、Getter & Sundland は、「男性が、女性よりも、社会的に望ましい反応を弁別する能力を、より多く持っていると信じる理由はない」から、男性の高い Es 得点は、むしろ、その文化的役割から説明可能であるとしているわけである。

本研究においては、上述のように、10%水準においても、男子群と女子群との間に有意な差は認められないという、アメリカの研究者の報告とは異なる結果が得られた。本研究の被験者が、大学生という限られた種類のみであり、かつ、MMPI 全項目を課していないので、Getter & Sundland および Gottesman の主張の本邦成人における適否を、直接に検討することはできない。

次に、RPRS [Sum] について、本研究と従来の研究の結果を比較してみると、当然のことであるが、本研究の被験者は、多田によって報告された学生相談室に適応上の問題で来談した大学生の治癒群、未治癒・中断群よりも、高い傾向にある。

しかし、本研究の両群の RPRS [Sum] の平均は、鈴木 (1965) の結果より低く、その差は0.1%水準で有意であった ($t=4.6388$)。第4表に示した RPRS [Sum] 段階別被験者数からも明らかのように、本研究の被験者の半数はⅢとⅣの段階に含まれて、鈴木 (1965) の結果よりも、[Sum] の低い者が多かった。その理由として考えられることは、鈴木 (1965) の研究の被験者が、謝金なしの被験者募集に自発的に応募してきた学生であるのに対し、本研究の被験者は、講義を受講している全学生で、テスト被験は半義務的に課した仕事であったため、テストに対する動機づけが前者の場合より弱いこと、および、正常の範囲内であるが適応上問題をもつ学生が入りこんでいたことなどである。

第4表 RPRS (Sum) 段階別人数

研究者	被験者	RPRS (Sum) 段階					
		I	II	III	IV	V	VI
多田 (1960)	学生相談治癒者	0	4	9	0	0	0
	学生相談未治癒・中断者	0	0	6	2	0	0
鈴木 (1965)	大学生	1	24	5	0	0	0
鈴木 (本研究)	大学生男	0	24	29	1	0	0
	大学生女	1	28	20	2	0	0

また、本研究の男子群と女子群との間には、RPRS [Sum] に関して、有意な差は認められなかった。

第5表は、RPRS 下位項目加重得点を、男子群、女子群および両群に分けて示したものである。[M]、[FM]、[m]、[Sh.]、[Col.]、[F. L.]の記号は、RPRS の下位項目であって、それぞれ、人間運動反応、動物運動反応、無生物運動反応、濃淡反応、色彩反応、形態水準評価を意味する。第6表は、従来の研究のうち、本研究の結果と比較して興味のある多田と鈴木の報告をまとめて掲げている。

第5表 RPRS 下位項目加重得点

RPRS 下位項目	男子群		女子群		両群	
	平均	S D	平均	S D	平均	S D
[M]	1.41	1.03	1.65	0.95	1.52	1.00
[FM]	0.31	0.66	0.41	0.60	0.36	0.63
[m]	0.35	0.52	0.25	0.52	0.30	0.52
[Sh.]	1.87	1.29	1.86	1.34	1.86	1.31
[Col.]	1.63	0.95	1.87	1.00	1.75	0.99
[F.L.]	0.81	0.60	0.61	0.66	0.71	0.64

第6表 他の研究における RPRS 下位項目加重得点

RPRS 下位項目	多田 (1960)		鈴木 (1965)	
	学生相談治癒群	学生相談未治癒・中断群	大学生群	
	平均	平均	平均	S D
[M]	1.54	0.38	1.90	0.70
[FM]	0.31	-0.38	0.63	0.48
[m]	0.23	0.50	1.03	0.75
[Sh.]	0.94	-0.04	2.16	1.05
[Col.]	1.43	0.54	1.91	0.86
[F.L.]	1.19	0.93	1.20	0.45

本研究の被験者は、多田の研究の未治癒・中断群よりも、[m]、[F.L.]を除く他の項目において高い得点を取り、治癒群よりも、[M]、[F.L.]を除く他の項目において高い得点をとる傾向を示した。[m]については、多田の研究において、未治癒・中断群が治癒群より高いという矛盾があり、[M]については、治癒群と本研究の被験者との間には差がないとみられるので、一応問題から除くとしても、[F.L.]については、多田の結果と本研究の結果との間にはかなりの差があるので、この点に関しては、今後、学生相談室来談者を用いて検討してゆきたい。

本研究の被験者は、すべての RPRS 下位項目において、鈴木 (1965) の研究の大学生群よりも低い得点をとった。このことは、先述のように、本研究の被験者のテストに対する動機づけの低さ、および、適応水準の低い者の混入という理由によって一応理解可能である。また RPRS 下位項目得点の平均に関して、本研究の男子群と女子群との間には、いずれの項目においても有意な差は認められなかった。

第7表は、本研究における Es 得点と RPRS 下位項目得点および [Sum] との相関を示している。相関係数は偏差積法を用いて計算されたが、級間の数が10以下の場合には修正が行なわれた。表中 * 印は修正相関係数であることを示す。第8表は、多種の精神疾患者を被験者として用いた Adams & Cooper (1962) の研究結果を示している。

Adams & Cooper は、Es 得点と RPRS(Sum) との相関だけでなく、RPRS 下位項目得点との相関を求めている。彼らの用いた精神疾患群(I)は、鑑別不能な精神疾患を含め8種類の精神医学的診断に分類される患者から成り、精神疾患群(II)は、同様に12種類の精神疾患から成っている。

彼らの研究においては、精神疾患群(I)と(II)との間で、相関係数の変動が著しい。(I)群にお

自我の強さの二つの測度の関係についての検討

第7表 Es 得点と RPRS 得点との相関

*修正相関係数

RPRS 項目	男子群		女子群		両群	
	r	p	r	p	r	p
(M)	0.0721*		0.0325*		0.0617*	
(FM)	0.0944*		0.0806*		0.0740*	
(m)	-0.0138*		0.1434*		0.0734*	
(Sh.)	0.1778	<0.2	0.0836*		0.1312	<0.2
(Col.)	-0.0513*		0.0403*		-0.0249*	
(F.L.)	0.4581*	<0.001	0.1336*		0.3079*	<0.01
(Sum)	0.1586		0.1239		0.1334	<0.2

第8表 Es 得点と RRS 得点との相関 (Adams & Cooper, 1962)

RPRS 項目	精神疾患群 (I) N=29		精神疾患群 (II) N=36	
	r	p	r	p
(M)	0.16		0.32	0.10
(FM)			0.40	0.02
(m)			0.11	
(Sh.)			0.14	
(Col.)	0.54	0.01	-0.01	
(F.L.)	-0.09		-0.06	
(Sum)			0.13	

いて〔Col.〕は Es と 0.54 の相関を示し、1%水準で有意であるが、(II)群においてその相関は -0.01 という低いものである。(II)群において〔M〕と Es との間には 0.32 の相関があり、それは 10%水準でとりあげ得る有意性を示すが、(I)群においては有意な相関はない。(II)群において〔FM〕と Es とは 0.40 の相関を示し、それは 2%水準で有意であるが、(I)群においてはその〔FM〕は計算のために利用できるものではなかったという結果であった。このような矛盾した結果から、何らかの結論を導き出すことは殆んど不可能であり、彼らも、この Es と RPRS 下位項目との相関については、何の考察も行っていない。

本研究の場合、男子群において、Es 得点と有意な相関を示したのは〔F.L.〕得点であった。その相関は 0.1%水準で有意である ($t=3.7170$)。また、〔Sh.〕と Es との相関は、20%の有意水準でとりあげ得る程度のものであった ($t=1.3028$)。女子群においては、Es と有意な相関を示す RPRS 項目はなく、20%水準でとりあげ得る相関もみられなかった。男女合わせた両群においては、〔Sh.〕と〔Sum〕とが、Es との間に、20%水準でとりあげ得る程度の相関を示し ($t=1.3431$, $t=1.3661$)、〔F.L.〕と Es との間には、1%水準で有意な相関が得られた ($t=3.2844$)。結局、1%水準で有意な相関は、男子群および両群の〔F.L.〕においてのみ得られた。

〔Sh.〕は、個人が、保護、所属、愛情などの基本的欲求を、忌避、無感覚、拒否、受容などのかたちで処理する仕方、または、処理能力を表わすとする Klopfer の主張の理論的根拠は、鈴木 (1965) が指摘しているように、余りにうがち過ぎて臆測を述べている感が強いので、現段階では、男子群で得られた Es との相関の意味は不明確である。これに対して、〔F.L.〕が現実検証機能の健全度を示すという主張は、多くのロールシャッハ研究によって支持されていると言ってよいだろう

う。本研究においては、Es は、男子群において [F.L.] と有意な相関をしたが、女子群において有意な相関を示さず、男女合わせた両群において 1%水準で有意な相関を示した。したがって、その意味について確実な結論をひき出すことはもちろんできないが、今後の研究の方向について示唆を与えてくれる。Crumpton, Cantor & Batiste (1960) は、Es 尺度の因子分析的研究の結果、この尺度が「自我の強さ」の測定法でなくて、「自我の弱さの欠如」の程度を測定する消極的方法であるとの結論を得ている。Es 得点が、不健全な自我機能の欠如の程度から評定された自我の強さの測度であるとしても、本研究の結果から、正常者においては、Es 得点が、自分のパーソナリティ体制と環境の諸条件との関係についての理解力を主な機能とする現実検証能力と、何らかの正の関係があることを推定させるのである。Es 得点が社会的望ましきについての識別能力と関係があるとする Gottesman (1959) の指摘は、今後、研究課題としてとりあげ追求する価値があると思われる。

先述のように、Es 尺度と RPRS 各項目との関係については、Adams & Cooper の研究があるが、RPRS [Sum] との関係については、Endicott & Endicott (1964) と小川 (1965) の研究がある。Endicott & Endicott は、器質的脳障害者と知的欠陥者を除く心理療法可能な精神病患者を被験者として、精神分析療法を実施した群 (N=21) と、心理治療待機群 (N=40) とにおける、Es 得点と RPRS [Sum] との相関を求めており、前者では 0.22、後者では 0.12 を得ているが、いずれにも有意性を認めていない。小川は、分裂病群 (N=20) では 0.238、神経症群 (N=20) では 0.298、正常群 (N=20) では 0.184 の相関を得ているが、いずれも有意ではなく、順位相関を用いたところ、それぞれ、0.194、0.414、0.308 で神経症群に有意性を見出している。

上述の諸研究と本研究とを比較してみると、Es と RPRS [Sum] との相関係数はいずれも相似た値であり、両尺度間に有意な相関を見出し得ないという共通の結果を得ることができる。したがって、両尺度は、同一のパーソナリティ変数を測定していないと結論することができる。

4. 要 約

Barron の Es 尺度と Klopfer の RPRS は、ともに、自我の強さの測定法として提案されている。この両尺度が同一のパーソナリティ属性を測定しているならば、両尺度間に高い正の相関があることが期待される。本研究では、大学生 105 人 (内女子 51 人) を被験者として、Es 尺度 68 項目を単独形式で課し、その後、個別的にロールシャッハ・テストを実施した。Es 得点と RPRS 下位項目得点および合計得点との関係について、従来の諸研究と比較しながら、検討を行なった。その結果は次の通りである。

(1) Es 得点に関して、本研究の被験者は、従来の研究結果より低い得点をとる傾向がみられた。アメリカの研究者の結果では、男性は女性よりも有意に高い得点をとっているが、本研究では、男子群と女子群との間に有意な差は認められなかった。

(2) RPRS 合計得点に関して、本研究の被験者は、学生相談治癒者、未治癒・中断者よりも高い得点をとる傾向がみられたが、本研究による大学生を被験者とした以前の研究結果よりも、有意に低い得点をとった。このことは、テストに対する動機づけの弱さ、適応水準の低い者の存在などの理由によって一応理解され得るものとした。RPRS 下位項目および合計得点に関して、男子群と女子群との間に有意な差は認められなかった。

(3) 両尺度間との関係については、男子群と男女合わせた両群における RPRS 下位項目 [F.L.] と Es 尺度の間においてのみ、1%水準で有意な相関が認められた。しかし、従来の研究結果と比較

自我の強さの二つの測度の関係についての検討

して考えるとき、Es尺度とRPRS下位項目との関係について、いくらかでも確実な結論をひき出すことは困難であった。Es得点とRPRS合計得点の間には、従来の研究結果とほぼ同じ値の相関係数が得られ、有意な相関は認められなかった。したがって、両尺度は、同一のパーソナリティ属性を測定していないと結論した。

Barron : Ego Strength Scale

Physical functioning and physiological stability

- 153 (20) ここ2, 3年だいたい健康です。(T)
- 51 (10) 人一倍健康です。(T)
- 174 (21) 気が遠くなるようなことは、一度もありません。(T)
- 189 (24) いつも体じゅうが弱っているような気がします。(F)
- 187 (23) 手が不器用になったり、または思うように動かなくなったりしたことはあまりせん。(T)
- 34(6)しょっちゅう咳(せき)をします。(F)
- 2 (1) 食欲は普通です。(T)
- 14(2)月に何回か下痢(はらくだし)をします。(F)
- 341 (39) とときどき、音に対して敏感で困ることがあります。(F)
- 36 (7) 自分の健康について、そう心配することはありません。(T)
- 43 (8) 眠りがとぎれがちで、よく眠れません。(F)

Psychasthenia and seclusiveness

- 384 (47) 私は、誰に対しても自分のことをざっくばらんにうち明けることが、できないように思います。(F)
- 489 (56) 悲しみや心配ごとからいつまでも抜けきれない人に同情します。(F)
- 236 (32) だまって考えこむ方です。(F)
- 217 (28) 何かにつけてよく心配する方です。(F)
- 100 (16) どうしたらよいか決心がつかない問題(できごと)によくぶつかります。(F)
- 234 (31) カツとなりやすい方ですが、そのあとすぐケロリとなおります。(T)
- 270 (38) 外出するとき、戸に錠をかけたか、窓をしめたかなど気になりません。(T)
- 359 (43) つまらない考えが頭に浮かんできて、幾日も悩まされることがときどきあります。(F)
- 344 (40) 知っている人を見かけても、顔をあわせないように、道をさけることがよくあります。(F)
- 241 (33) 人にかくしていることがらを、よく夢に見ます。(F)

Attitudes toward religion

- 95 (15) 私はたいい日をきめて教会(またはお寺やお宮)にゆきます。(T)
- 488 (55) 毎週何度かお祈りをします。(F)
- 483 (54) キリストは、水をブドー酒に変えるような奇跡(きせき)を行ないました。(F)
- 58 (11) 世の中のことは、すべて聖書の予言者の言うとおりになりつつあります。(F)
- 420 (50) 私は、ふしぎな宗教的体験をしたことがあります。(F)
- 209 (27) 私の犯した罪は許しがたいものだと思います。(F)

Moral Posture

- 410 (49) ペテン師と勝負して、逆にいっぱいくわせてやりたいものです。(T)
181 (22) たいくつするとさわぎたくなります。(T)
94 (14) 私は後悔するようなことをよくやります(私はどうもひとより後悔することが多いよう
です)。(F)
253 (36) 悪い人だと思っても、その人と親しくつきあえます。(T)
109 (17) 親分ぶって威張っている人に対しては、その人の言い分が正しくても、反対したくな
ります。(T)
208 (26) 浮気をしたい。(T)
430 (52) 私は異性(男なら女)に心がひかれます。(T)
548 (64) ストリップ・ショウのようなものは見たくありません。(F)
231 (30) 性(セックス)の話をするのが好きです。(T)
378 (45) 女がタバコを吸うのはいやなものです。(F)
355 (42) 愛する人をいじめて楽しむことがときどきあります。(T)

Sense of reality

- 33(5)私は非常にふしぎな体験をしたことがあります。(F)
349 (41) 私は、独特の普通と変った妙な考えを持っています。(F)
251 (35) ちょっとの間ぼろーとなって何もできなくなり、まわりのできごとがわからなくなっ
てしまうことがあります。(F)
48(9)ひとといっしょにいと、奇妙な話が聞えてくるので困ります。(F)
22(3)ときどき急に笑い出したり、泣き出したりして、とめられないことがあります。(F)
192 (25) 歩くときに、体がふらふらすることはありません。(T)
62 (12) 体のどこかに、焼けるような感じがしたり、ひりひり痛んだり、むずむずしたり、しび
れる感じのすることがよくあります。(F)
541 (62) 私の皮膚(ひふ)は異常に敏感です。(F)

Personal adequacy, ability to cope

- 389 (48) 私の計画がむずかしすぎて、あきらめねばならないことがよくあります。(F)
82 (13) 議論になるとすぐ言い負かされてしまいます。(F)
32 (4) ひとつの仕事に心を集中することは、なかなかできません。(F)
244 (34) 私のやり方は、ほかの人から誤解されがちです。(F)
555 (66) ときどき自分の体が、メチャメチャにまいってしまうのではないかと思うことがあり
ます。(F)
544 (63) いつも疲れているような感じがします。(F)
261 (37) もし私が画家だったら、花を描きたいと思います。(F)
554 (65) もし私が画家だったら、子どもを描きたいと思います。(F)
132 (18) 花を集めたり、植木いじりをするのが好きです。(F)
140 (19) 私は料理をすることが好きです。(F)
380 (46) ほかの人がまちがったことを言ったときには、私はそのまちがいをなおしてやろうと
します。(T)

Phobias, infantile anxieties

- 367 (44) 火はこわくありません。(T)

自我の強さの二つの測度の関係についての検討

- 525 (61) 私は、ある種の動物は気味悪く感じます。(F)
510 (58) きたない物を見ると、ぞっとして胸がむかむかしてきます。(F)
494 (57) 便所や閉めきったせまい所にいるのがこわい。(F)
559 (67) 真夜中に恐ろしくなって目をさますことがよくあります。(F)

Miscellaneous

- 221 (29) 科学が好きです。(T)
513 (59) 家康 (Lincoln) は秀吉 (Washington) よりもえらかったと思います。(T)
561 (68) 乗馬をとてしてみたいと思います。(F)
458 (53) 子どもの頃一番身近な男の人 (父, 継父など) は非常に厳格でした。(T)
421 (51) 家族の中には、たいへん神経質な人がいます。(T)
515 (60) 私のうちでは、ふだん必要な物 (食料品, 衣服など) はいつも間にあります。(T)

各項目の前の数字は原版冊子式 MMPI の番号, 括弧内の数字は本研究の単独形式質問紙における番号を示す。各項目の後の括弧内の記号は, それぞれ, T (はい), または, F (いいえ) と回答された際に, その項目に対し 1 点が与えられることを示す。

Klopfer : Rorschach Prognostic Rating Scale

[M]

各M各応は, 次に示す 3 つの規準に従って点が与えられ, それら 3 つの点の平均を, そのM反応の点数とする。

規 準

1. 空間における運動の量
 - a. 生活空間の増加 (ダンスをする, 走る, 話し合う, 指さすなど) 1
 - b. 生活空間の減少 (おじぎをする, ひざまずく, 泣く, うずくまる, すべてのHd反応など) ½
 - c. 単なる生存 (眠っている, 横たわっている, 坐っている) 0
2. 運動を見ることの自由さ
 - a. 自発的に運動を見る 1
 - b. 運動の表現に媒介的な手段を用いる (誰かが歩いている絵) ½
 - c. 質問段階でしぶしぶ与えられる,あるいは,場面の論理的構成からのみ結果として生じる 0
3. 文化的へだたり
 - a. 近接文化領域内の現実性を有する人 1
 - b. 文化的へだたりのある現実性を有する人物, その文化領域内で普通の空想的な人物像, 装具によって定路上人間の形がかくされている人物像 (ミッキー・マウス, スーパーマン, 潜水服を着ている潜水夫) ½
 - c. 特異な空想的人物像, 文化的, 歴史的に極端にへだたりのある人物 (ネアンデルタール人など) 0

M—の反応には -1 点を与え, 他のM反応は以上のように計算し, これらの点の代数和を粗点とする。この粗点は次の表により加重得点に換算される。

Mの粗点	加重得点
5 ~ 10.9	3

3~4.9あるいは11~15.9	2
1~2.9あるいは16~20.0	1
1より小, あるいは20より大	0
0より小	-1

[FM]

各FM反応は、次に示す3つの規準に従って点を与えられ、それら3つの点の平均点を、そのFM反応の点数とする。

規 準

1. 空間における運動の量
 - a. 生活空間の増加（走る, 跳ぶ, うなり合う）…………… 1
 - b. 生活空間の減少（うづくまる, 身をかがめる, うつぶせる）…………… ½
 - c. 単なる生存（眠っている, 横たわっている, 坐っている, 立っている）…………… 0
2. 運動を見ることの自由さ
 - a. 自発的に運動を見る…………… 1
 - b. 運動の表現に媒介的手段を用いる（飛んだり, 登ったりしている動物の絵, トーテムの動物の像）…………… ½
 - c. 質問段階でしぶしぶ与えられる, あるいは, 場面の論理的な構成からのみ結果として生じる…………… 0
3. 文化的へだたり
 - a. その文化領域内で普通の現存する動物（犬, 熊, 猫, カニ, 象, ライオン, クモ, 猿）…………… 1
 - b. 現存する珍しい動物, 普通の絶滅した動物, その文化領域内で普通の空想的動物（恐竜, ミッキー・マウス）…………… ½
 - c. 特異な空想的, あるいは, 文化的に極端にへだたりのある動物（ペガサス, 地獄の門の番犬, アメーバー）…………… 0

FM一の反応には-1点を与え、他のFM反応は以上のように計算し、これらの点の代数和を粗点とする。この粗点は次の表により加重得点に換算される。

FMの粗点	加重得点
2以上	1
1~1.9あるいはFM粗点がM粗点の2倍以上	0
0~0.9	-1
0より小	-2

[m]

各m反応は、次の規準のうち1つに従って点を与えられる。

1. 自然の, あるいは機械的な力
 - a. 引力に抗する力（爆発, ロケット, 機械的運動, 自動湯沸し, 火山）…………… 1
 - b. 引力によるとき（落ちてくる, 落ちそうな不安定な岩）…………… ½
2. 抽象的な力
 - a. 無生物に投影された表情（悪魔的な表情をしたカボチャ）…………… 1
 - b. 反発力, あるいは, 吸引力（「これが2人の人を引き離したり一緒にさせたりするので」とか「これはすべての力が発する芯となるものです」というような反応）…………… ½

自我の強さの二つの測度の関係についての検討

c. 力の消散（図段Ⅷの下部のDに「とけるアイスクリーム」，図版IXに「悪くなった食事」というような反応）…………… 0

F_m— 反応には-1点を与え，他のm反応は以上のように計算し，これらの点の代数和を粗点とする．この粗点は次の表により加重得点に換算される．

mの粗点	加重得点
3～5.9	2
1～2.9あるいは6～10.0	1
0～0.9あるいは10.0より大	0
0より小	-1

[Sh.]

濃淡に関する各項目は次のように点が与えられる．個々の点数の代数和を求め，その合計を項目数で割り，3倍する．この際，その項目が1つの反応に対するものか，全記録の特性に対するものかに無関係になされる．その点数が，濃淡反応の加重得点である．

反 応	評 点
F _c （暖かさ，柔らかさ，透視）	1
FK	1
F _c 否定	1/2
F _c （冷たさ，固さ）	1/2
K, KF	0
F _c （色彩として使用された濃淡）	-1/2
F _k , kF, k	-1/2
cF	-1/2
F _c —	-1
FK—	-1
F _c （不健全な状態にある内臓）	-1
c	-1

全記録の特性

濃淡回避	-1/2
濃淡への感受性の欠如	-1

[Col.]

濃淡反応の場合と同じ計算法である．

FC	1
CF（爆発的，あるいは受動的）	1/2
Cdes	1/2
色彩否定	1/2
Csym（昂揚的）	1/2
反応としてとりあげられない不快感を示す色彩に関する感想（図版IIに「その赤は無意味です」というような反応）	1/2
F↔C（こじつけ的結合，あるいは無造作な結合）	0
F/C, C/F	0

Csym (抑うつ的)	- 1/2
不健全な状態にある内臓として用いられた色彩	- 1/2
CF (何らの感情をも伴わずに与えられた爆発的反応)	- 1/2
FC—	- 1
CF—	- 1
C, Cn	- 1
色彩混交	- 1
(F, L,)		

各反応について普通の方法で形態水準の評定をする。そして、次のように修正する場合を除いて、平均形態水準評点が加重得点として用いられる。

1. 記録中に、形態水準を「弱める」明細化（その反応の形態水準評点が 0.5 減点されるような明細化）が生じた時は、全記録の加重形態水準評点から 0.5 減点する。
2. 全記録中の最低の形態水準評点が負数であり、それと最高の形態水準評点との差が 3.0 以上の時は、加重得点から 1.0 減点する。
3. 前記の 2 つは、1 つの記録に累加して用いる。すなわち、前記の 2 つが、1 つの記録中に生じた時には、平均形態水準評点から 1.5 を減ずる。

[Sum], すなわち、予後評定総点 (Final Prognostic Score)

予後評定総点は、前述の 6 個の加重得点の合計である。予後評定尺度の異なった段階に対して、試みに次のような意義を付した。

範囲	段階	意義
17~13	I少しの助力を必要とするだけで、ほとんど自力で立ちなおることのできる有望なケース。
12~7	II自力で問題を解決する点では、前記のものほど良くないが、ある程度の助力によってかなり良くなる。
6~2	III確率は 1/2 より大、いかなる治療も何らかの助けとなる。
1~-2	IV確率は 1/2。
-3~-6	V困難なケース。少しは良くなるかもしれないが、一般に予想はよくない。
-7~-12	VI望みないケース。

文献

Adams, H. B. & Cooper, G. D. Three measures of ego strength and prognosis for psychotherapy. *J. clin. Psychol.*, 1962, 18, 490-494.

Barron, F. Some test correlates of response to therapy. *J. consult. psychol.*, 1953a, 17, 235-241.

Barron, F. An ego-strength scale which predicts response to psychotherapy. *J. consult. Psychol.*, 1953b, 17, 327-333.

Crumpton, E., Cantor, J. M., & Batiste, C. A factor analytic study of Barron's ego strength scale. *J. clin. Psychol.*, 1960, 16, 283-291.

Endicott, N. A., & Endicott, J. Prediction of improvement in treated and untreated patients using the Rorschach Prognostic Rating Scale. *J. consult. Psychol.*, 1964, 28, 342-348.

Getter, H., & Sundland, D. M. The Barron ego strength scale and psychotherapeutic outcome. *J. consult. Psychol.*, 1962, 26, 195.

Gottesman, I. I. More construct validation of the ego-strength scale. *J. consult. Psychol.*, 1959, 23,

自我の強さの二つの測度の関係についての検討

342—346.

Hathaway, S. R. & Briggs, P. F. Some normative data on new MMPI scales. *J. clin. Psychol.*, 1957, 13, 364—368.

Klopfer, B., Kirkner, E. J., Wisham, W., & Baker, G. Rorschach Prognostic Rating Scale. *J. proj. Tech.*, 1951, 15, 425—428.

Klopfer, B., Ainsworth, M. D., Klopfer, W. G., & Holt, R. R. *Developments in the Rorschach technique*. Vol. I, World Book Co., 1954.

小川捷之 自我の強さ (Ego Strength) の測定に関する研究, 東京教育大学教育学部紀要, 1965, 第11巻, 107—122.

小川捷之 自我の強さ (Ego Strength) の測定に関する研究—文献的研究—, 東京教育大学教育相談研究所教育相談研究, 1966, 第7集, 67—84.

Silverman, J. The validity of the Barron ego strength scale in an individual form. *J. consult. Psychol.*, 1963, 27, 532—533.

鈴木正義 クロッパーの自我の強さの測定法についての一検討, 北海道学芸大学函館人文学会人文論究, 1965, 第26号, 53—73.

多田治夫 学生相談におけるロールシャッハ予後評定尺度の妥当性, ロールシャッハ研究, 1960, 3, 90—98.

Taft, R. The validity of the Barron ego-strength scale and the Welsh anxiety index. *J. consult. Psychol.*, 1957, 21, 247—249.